

ために大名を申入る時は、手水鉢の前のふみ石の右のわきに、又石一ツ少ひきくすへる事なり、にじりあがりにては、もちろんせきたをもなをさるべし、

一 刀脇指、主君のは二腰ながら刀かけにあげ置て、我刀は中路地より小者にわたし、脇指ばかりにて参るなれば、我脇指を刀懸の下に立かけてをくべし、

〔茶之湯六宗匠傳記〕千利休宗易居士自筆

一 高位の御客、肩衣或は被取給ふ共、其時相客に参る人は上衣取べからず、取と高位よりも御免御意にまかせ可申、一旦とれと被仰候共不可取也、

〔和泉草〕<sup>三</sup>貴人ノ御供ニ参時之事

貴人ノ御供ニ参リ、クマリ際ニ雪駄不立ロクニフミ揃テ置テ吉腰掛上リ候ヘト御意有時、上リ踞リ居テ吉御意ナキ以前ハ、圓座ヲ飛石ノ上ニ置、其上ニ居テ吉、

〔貞要集〕<sup>四</sup>數寄屋外内路次入客亭作法之事附禮義之事

一 貴高の御相伴にまいり候節は、其身をあらためたしなみ待合にまで御先へ参居可申候御客揃候時、亭主御迎に出、中潜敷居に手を掛、御挨拶ありて、手巾にて敷居をふき戸を立る、一、二寸明て置也、また主君などへは、中潜より外へ出て、御挨拶申事本意なり、扱上客中潜の内へ御入候と、次の御客に構申さず、引つゞき内へ入、砂雪隠の戸を明ケ掛、御目路地の内植込飛石等譽申す御挨拶仕り、手水の前へ御先へまいり、中腰にて柄杓を取、御手水掛ケ申候、此時あたらしき手拭、紙に包封して懷中にたしなむべし、若手拭御用達可申ため也、御手水濟して御跡につき、躡上り際へ参、御腰の物をうけ取、刀かけに大小掛、躡上りより御入候と、御草履を直し申候、それより御相客段々に御入候うちに、手水を遣、刀掛の下可然所に、自分脇ざしをぬき、小尻の下に鼻紙四五枚四ツ折にして敷脇指立かけ置なり、扇子はさして入たるがよし、茶入の蓋を載せ、或は塵埃も拂